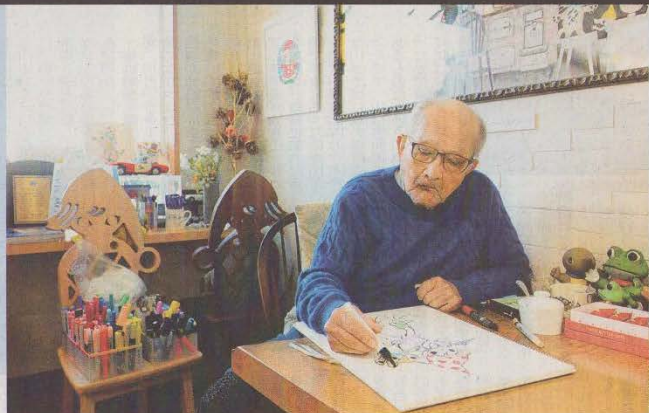


特集ワイド

今年100歳、なお意欲 影絵作家・藤城清治さん

この影絵作家の作品を見ると、子ども時代の楽しかった思い出がよみがえってくる。藤城清治さんが表現するメルヘンの世界を、誰もが一度は目にしたことがあるだろう。4月には100歳を迎える藤城さん。今なお創作意欲が衰えず、ロシアのウクライナ侵攻や能登半島地帯に心を痛めている。

希望込めて描く現実



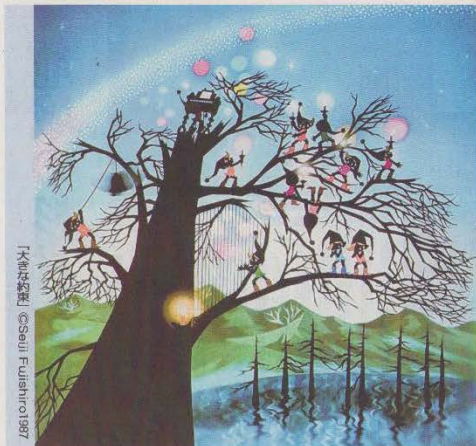
東京都大田区で、内藤絵師撮影

ふじしろ・せいじ 1924年、東京都生まれ。慶応大卒。48～96年「暮らしの手帖」に影絵を連載。4月5日～6月5日に福岡市博物館で「藤城清治100歳 美しい地球 生きるよろこび 未来へ」展を開催予定。

カフェの近くをウォーキングする藤城清治さん(右) ©Seiji Fujishiro Museum2023



③「美しい地球 100才生きる喜び未来へ」©Seiji Fujishiro2023
④「南三陸町防災対策庁舎 がんばるは宝石」©Seiji Fujishiro2012



「希望込めて描く現実」©Seiji Fujishiro1997

東京都大田区にある藤城さんアプロデュースの「ラ・ビ・カフェ」を訪ねると、鮮やかな青白のセーター姿で迎えてくれた。あどけうで眉目達するほほ笑みらしいは、返答し、「80代までは一日1万歩は歩いていたんだけどね。そう笑うとおもしろにポケットから歩数計を取り出した。画面を見ると、33350歩。健康の秘訣は歩くこと、東京都目黒区の自宅兼アトリエからカフェまでは毎日ウォーキング(往復)1日5000～6000歩は歩く。藤城清治美術館(栃木県那須町)の館長を務める娘の藤城由美さんは、「今はアトリエより、カフェの仕事をするのが多いですわね」と語る。意気盛んな藤城さんに絵を描き始めるのを止めるように、藤城さんの描き出すのは、例のサインペンを手にして、7代名詞である「大きな木」の動物の中でも特に好きという猫のツショツトをわすか10分ほどで描き出した。「80歳、90歳の時よりもうまっ描けるんじゃないかな」

現在は毎日、制作に取り組みことはないものの、アイデアが浮かぶと何時間でも描き続けるという。1月には震災のため避難所を訪ねたこと、また震災した「母は宝石」は世界中に広げられた。

笑顔で浮かべた。

南三陸、ウクライナ、能登 芸術の力信じる

「人の住む建物や動物が破壊され、人の命が奪われるようなことを、人間同士がやっていることをおかしに思っています。もしも幸せに思っていることが人間になくもある。戦争なんかが一番の不幸なことだ。そう思う藤城さんは、ウクライナ侵攻にも思いを寄せる。

軍事侵襲が始まり、間もなく半年。最近では関心が薄れつつあることが気がかりだという。「現在の戦争が、まだに続いているのに、忘れてしまっているのか。これ以上援助できないか」「支援援手」と言われませんが、ウクライナの人々を絶対見捨ててはいけません。科学やテクノロジーが発達し、ウクライナは無人機(ドローン)攻撃が戦況を左右するまで言われる。「でもね、最終的には科学の進歩よりも文化や最終的には人の心、人間の心で勝つんだ」といふ。藤城さんの言葉は、平和をまたずここに役立ててほしいなと思います。ウクライナをテーマにした作品を描き、売り上げの一部を国連大使館に寄付するチャリティ販売にも取り組む。

取材の最中に尋ねた大正昭和と平成令和と四つの時代を生きてきた今の藤城さんは「100年は長かったと思う。短かかったという気もします。100歳好になっちゃうと大切なことがないかな。命の大切さというものが、『西大博』

『あゝ、思い出さない』と思ふのではなく、震災の現実を描くことによって、未来への希望を感じることができる。そんな絵を描いていくことが彼の使命なんじゃないかな。元日に発生した能登半島地震に接したと表情が一変したようにも、能登半島に在る灯籠塔「キリコ祭」の影絵にしようと考えていたという。「いつか現地に行つて描きたい」という気持ちで筆を執っています。いずれ状況が許せば、娘の亜美さんと訪問するつもりだ。